

性愛の内と外

—— 精神分析による「家族の愛」の理論 ——

立 木 康 介*

家族をめぐる社会的言説のなかで、多くの場合、家族のなかに見いだされると暗黙裏に前提されている（少なくともそう見え、そう感じられる）にもかかわらず、実際には、正面からほとんど論じられることがない事項が存在する。愛である。

なるほど、フィクションの場合や、事実から「物語」を取り出そうとするタイプのドキュメンタリーにおいては、話は別だ。これらのジャンルでは、家族内の個々の成員のパーソナルな事情に踏み込んだり、それを浮き立たせたりすることができる（あるいは、そうすることこそが目的になる）。さらには、ある家族のうちに生じる情緒的結束が、他の家族のそれをいかに上回るか、それといかに異なるかを、際立たせることすらできる。逆にいえば、このように「個人的なこと」に立ち入らぬかぎり、「愛」について真剣な言説を紡ぐことはむずかしいのかもしれない。これはおそらく家族愛にかぎったことではなく、およそ愛と名のつくもののいっさいに当てはまる困難であるといえる。

一方、家族愛、家族のなかの愛について、フィクションやドキュメンタリーではなく、¹学術研究の平面でアプローチするとき、私たちはひとつの空白の前に立たされないだろうか。これらの愛を一般的に把握し、その輪廓を描き、その本性や生成プロセスを分析することを可能にする「理論」の不在の前に。もちろん、これもまた「家族愛」に限定して指摘されるべき問題ではない。私たちは21世紀の最初の四分の一を過ぎた今に至ってもなお、愛の一般理論なるものをひとつも手にしていない。にもかかわらず、人々は愛について語ることをやめず、家族という人間集団のうちにもそれを求めることをやめない。いや、はじめに述べたように、²家族のうちにもそれがあると前提することをやめない。

この矛盾を前にして、私たちが取りうる態度はおそらく二つに一つだ。家族のなかの「愛」などという得体の知れぬもの、実体があるのかどうかも分からぬものに、かまけることは諦め、この問いそのものを見て見ぬふりをすること。多少なりともシニシズムを感じさせずにはおか

*ついき こうすけ 京都大学人文科学研究所

ないこの態度を、精神分析家なら「否認」と呼ぶかもしれない。それにたいして、もうひとつの可能性は、愛の実在を肯定し、いや、より正確には、「愛」という語によって名指される何物かが家族のなかに見いだされることを素朴に信じ、それに理論的なアプローチをかけることである——たとえば、その際に応用される理論や、それらの合成の結果、新たに生み出される理論そのものは、フィクションにすぎないかもしれないにせよ。

私たちのオプションは、無論この後者のほうだ。ただし、垂直方向・水平方向ともに幾重にも取り出しうる家族関係のうち、ここではもっぱら夫婦間および親子間の愛に限定して、理論的検討を進めなくてはならない（祖父母と孫の関係や、きょうだい関係には、とりわけこの後者の問いの複雑さのゆえに、立ち入ることができない）。そして、そのために私たちが利用しうる理論は、さしあたり、精神分析のそれ、より具体的には、フロイトからフランス精神分析の伝統に受け継がれ、幾度かにわたっていわば建て増しされてきた理論（のみ）になる。しかしそれだけでも、そこに開けてくる問いの陰しさを知るには十分であり、さらには、家族の愛の理論の素描という目的のために、精神分析がいかなる役割を果たしうるか（あるいは果たしえないか）、いや、そもそも、それが役に立つのかどうかを吟味するのにも不足はなからう（本稿で試されるのは、もちろん愛のほうではなく、理論のほう、精神分析のほうである）。

I 「愛の理論」としてのリビドー理論

まずはフロイトから、あらゆる意味において象徴的な一節を引用することからはじめよう

リビドーとは、情動理論からきた表現である。愛としてまとめあげることのできるものなら何であれ、そのすべてに関係する欲動のエネルギーを——現時点では計測不可能だとしても——量的な大きさとして考察する場合に、われわれはリビドーと呼んでいる。われわれが愛と呼ぶものの核をなしているのは、もちろん、一般にも愛と呼ばれ、詩人たちが歌い上げてきたもの、つまり性的合体を目標とする性愛[Geschlechtsliebe]である。しかしわれわれは、それ以外にも愛の名に関係しているものをそこから切り離しはしない。つまり、一方で自己愛、他方で親や子への愛、友情や一般的な人類愛、さらには具体的な事物や抽象的な理念への献身なども除外しない。そうすることは、われわれの考えでは、以下の理由により正当化される。つまり、精神分析の研究がわれわれに教えてきたところでは、これらの追求はいずれも同じ欲動の蠢きの表現であり、それは両性の間では性的合体を求めて突き進むが、他の状況下でも、なるほどこの性的目標の脇に押しやられたり、あるいはそれに到達するのを妨げられたりすることはあるにせよ、それでもやはりもとも

との本質を常に十二分に保ち続け、（自己犠牲や接近の追求という形で）その同一性をそれとわかる仕方で維持しているからである。

つまり、われわれはこう考える。言語は、「愛 [Liebe]」という単語によって、それがどんなに多様に用いられようとも、あくまで正当なまとまりを生み出しているのであり、われわれの学問的究明と叙述にとっても、この愛なるものを土台に置くこと以上に正しいやり方はないだろう、と。この決断のせいで、精神分析は憤激の嵐を巻き起こすことになった。まるで、それがもたらした革新は冒瀆にも等しい罪だ、とでも言わんばかりに。しかし、そうは言うが、愛をこのように「拡大」解釈することで、精神分析は独創的なことなど何も成し遂げてはいない。哲学者プラトンの「エロース」は、その由来においても、働きにおいても、性愛との関係においても、愛の力と精神分析のいうリビドーとぴったり重なり合うのである […]。

さて、この愛の欲動は、精神分析においては《大勢において》[a potiori]、またその起源からして、性欲動 [Sexualtriebe] と呼ばれている。「教養ある人々」の大半はこの命名を侮辱と感じ、精神分析に「汎性愛主義」という非難を浴びせかけることで侮辱の恨みを晴らそうとした。セクシュアリティ [Sexualität] を、何か人間の自然本性を恥じ入らせ卑しめるものと受け止める人々は、そうしたければ、エロースだのエローティクだのといった、より格調高い表現を用いるがよろしかろう。私自身も、始めからそうすることはできたのだし、そうすれば多くの異論なしで済みますこともできただろう。しかし、私はそれを望まなかった。 […]」¹⁾

これは、四年にわたる「戦争」という集団的現象（あるいは集団的行為）を見てきたフロイトが、折からの学術的ブームにも乗り、「集団心理」への精神分析理論の応用を試みると同時に、「暗示」という古くて新しい現象（戦争神経症にたいするその治療的効果により、再び注目を集めていた）に理論的決着をつけるべく、いずれのテーマについても「愛」をキー概念として解明に乗り出した著作『集団心理学と自我分析』（1921）の一節である。ただし、「愛」は一般的にすぎる単語であるため、そのエネルギー論（精神分析の用語では、「経済論」）的側面を前面に押し上げる形で導入した「リビドー (libido)」なる概念を利用しよう、というわけである。

私たちの興味を惹くのは、しかし、ここでは集団心理でも暗示でもなく、あたかもメタファーの双方向性（たとえば、神を父に準えることもできれば、父を神に比することもできる）を思い出させるかのように²⁾、フロイトがリビドーを愛（の経済論的本体）として定義づける——いや、より正確には、「リビドー」という概念の定義に、本来それが代理すべき「愛」の観念をもちこむ、と言うべきだろうか——ことで、定義の双方向性が生まれることだ。つまり、リビドーを愛で説明することが、同時に、愛をリビドーで解明することを伴いうる（あるいは、

そうする道筋を開く) ののである。私たちにとって重要なのは、いうまでもなく、この後者のほうである。つまり、リビドーの本性や、それにまつわる心身の諸機構を調べることで、「愛」の何たるかを解明しうる、あるいは、少なくとも、そのために欠かせない精神分析的議論を積み重ねることができる——そう望むことが許されるだろう。

では、あらためて、リビドーとは何だろうか。フロイトにおいて、それは何よりも「性欲動 (Sexualtrieb)」のエネルギーである。だが、このことの意味を把握するには、そもそも「欲動」とは何であるかを知らなくてはならない。欲動とは、「外界からではなく、有機体そのものの内部から生じる」³⁾ 刺激であり、またそれをもたらす「力 (Kraft)」である。有機体は、外部からやってくる刺激にたいしては、逃避や防御といった反応を示すことができる一方、内部に発する刺激にたいしては、そうした手段をとることができない。それゆえ心の装置 (心的装置) は、この内的刺激を解消するために特定の手段を講じなければならず、それらの手段は、とりわけ乳幼児期の段階では他者の手を借りて、後天的に学ばれ、獲得されなくてはならない。ここに、人間の心的発達の原因がある。

フロイトにおいて、「欲動」は、1905 年の著書『性理論の三篇』前後から本格的に論じられるようになり、1915 年の論文「欲動と欲動運命」で初めて体系的に説明されたのち、1920 年の問題作『快原理の彼岸』において重大な変更を加えられ、その前と後でまったく異なる相貌を見せる。フロイトは多くの点で二項対立論者であり、二つのものの葛藤という図式を好むが、1920 年の前後で、欲動を印づける二元論が変化するのである。まず、『快原理の彼岸』に先立つ第一の欲動論は、性欲動と自己保存欲動 (自我欲動) の対立を措定する。その際、リビドーは厳密に性欲動のエネルギーと位置づけられ、相対する自己保存欲動のそれは「関心 (Interesse)」と名づけられた。じつは、この両欲動は、それぞれに想定される性質だけでなく、そもそも概念としての密度ないし強度が異なる。神経症の観察からフロイトが確信をもって取り出すことができたのは、「性欲動の抑圧」というメカニズムのみだった。つまり、「欲動」として理論の平面に措かれうるのは「性欲動」のみだった。だが、性欲動の抑圧が生じるには、それを抑圧する別の心的な力、すなわち別の種類の欲動を想定しなければならない。その必要性から、主に空腹や排泄のような生理的欲求にかかわる「もうひとつの欲動」として、半ば演繹的に仮定されたのが「自己保存欲動」だった。それゆえ、この第一欲動論において、フロイトの探求がつねに「性欲動」先行で行われた観は否めない。

これにたいして、1920 年以降の第二の欲動論の軸をなすのは、比較的よく知られた「生の欲動」と「死の欲動」の対立である。ここでは立ち入ることができないが、この理論的変動をもたらしたのは、1914 年に「ナルシシズム」の概念が導入され、性欲動の内部に「自我リビドー」と「対象リビドー」の区別が生まれる一方、自我の内部にも性欲動 (自我リビドー) と自己保存欲動の混在が想定されるようになったことで、第一欲動論が陥った不安定さだった

（とりわけ、この最後の点は、リビドーは性的なものに限定されないとするユングの主張への接近を意味しかねないだけに、フロイトには耐えがたかった）。ところが、『快原理の彼岸』に展開される長い思弁の結果、生の欲動と死の欲動の対立図式が定式化され、自身にとって満足のいく形で二元論が安定感を取り戻すと、フロイトは——「時の流れとともに、〔死の欲動をめぐる諸見解〕は私を捉えて放さなくなったため、私はもはや別様に思考することができない」⁴⁾と自ら告白するとおり——「死の欲動」の諸相とその帰結の追求に没頭していく。そのせいか、フロイトは新旧二つの欲動二元論に架橋することを気かけず、必要と思われる整理や手直しを行わなかったため、両理論の対応関係は今日でも決着を見たとはいいがたい。大筋では、第一欲動論における「性欲動」および「自己保存欲動」がともに第二欲動論における「生の欲動」に吸収されると考えて差し支えないが、フロイトには自己保存欲動を死の欲動に近づけるかのような記述もあり、議論の余地はなお残る。実際、第二欲動論の深化に打ち込むフロイトにとって、「生の欲動」（そのなかで理論的な価値をもつ部分）は事実上「性欲動」によって代表されていたのであり、そのことはフロイトが生の欲動を「エロース」と通称していたことにも現れている。

いずれにせよ、私たちにとって重要なのは、「死の欲動」の導入によって、「性欲動」そのものの概念や理論に変更が加えられることはなかった、ということである。フロイトのなかで、性欲動の諸理論（性欲動の「運命」にかかわる諸理論）は1920年以前にほぼ完成しており、それはこの欲動に対抗する力が自己保存欲動であるか死の欲動であるかにはかかわらないのである。ただし、性欲動の発達のプロセスについて考える際には、死の欲動ではなく自己保存欲動をその傍らに措くことが欠かせない。これは、いま述べた事情を踏まえるといささか逆説的に聞こえるかもしれないが、むしろ、追って示すように、自己保存欲動が実際には身体の生理的機能を言い表す概念であると考えれば、腑に落ちる。つまり、性欲動の機能や発達は身体の生理的機能との関係において（あるいは、それとの明確な対比において）捉えられなくてはならず、性欲動と死の欲動の対立はそれとは別の平面に措かれている、ということだ。それゆえ、以下では、もっぱら第一欲動論（性欲動／自己保存欲動）の枠組に沿って、性欲動とそのエネルギー「リビドー」についての議論を続けよう。

Ⅱ 「寄りかかり理論」とリビドー発達論——性愛とそうでない愛

リビドーの概念を軸にして「愛」を考えるとときの困難は、リビドーがあくまで性欲動のエネルギーとして、つまり人間のセクシュアリティの駆動力として定義づけられるため、いきおい「性愛」が標準化され、いわば完成形とみなされるのにたいし、そうではない愛（性愛ではないとみえる愛）、はじめの引用でフロイトも挙げている「親や子への愛」が、どこか二次的なもの、あるいは亜流のようなものに格下げされて見えてしまうことである。このことは、リビドーの

生成や発達をいかに —— こういってよければメタ理論的に —— 評価するかにかかっている。

そこに踏み込む前に、いっさいのリビドー論，というより欲動論の前提になる仮説を一瞥しておかねばならない。フロイトは人間の心（精神）を，いくらかの「量」（エネルギー）をもつ刺激が通過したり，そこに拘束されたりする，ある種の物理的な装置として表象するが，この「心的装置」にはひとつ（だけ）の活動原理がビルトインされている。それは，装置内を流動する刺激量を最小限に保とうとするホメオスタシスの原理であり，フロイトはこれを「快原理（Lustprinzip）」と名づけた。刺激量の増加（緊張の高まり）が「不快」として，その減少（緊張の低下）が「快」として経験される，という意味である。この機構が，自己保存欲動および性欲動（これらはいずれも「刺激量」として流入する）を心的装置が処理する際の共通の基盤になる。いや，というより，もともとは外的刺激（外界からの刺激）と自己保存欲動とに対処するため起動されたこの原理を，後発の性欲動（リビドー）が利用するのだと見るほうが正しいかもしれない。

だが，快原理についてはなおいくつかの説明を加えなくてはならない。快原理の機能を例証するために，フロイトは，空腹を覚えた乳児が手足を動かしながら泣くという，ごく単純なパラダイムを挙げている。乳児のこうした反応は，空腹という欲求の刺激が引き起こす緊張を，身体の運動によって発散する試みである。それを目にした育児者がミルクを与えれば，乳児はその緊張から解放される，すなわち，刺激の低下による快を経験する。だが，このプロセスはそれで終わらない。心的装置の内部には，これらの快や不快の痕跡が「表象（Vorstellung）」の形で留まり，いったん生成した表象はそれをもたらした経験の代理を務めるポテンシャルをもつ。そうすると，心的装置は，たんに不快を外部に排除することに留まらず，よりラディカルに，かつての不快と同様の不快に見舞われると，すでに登録済みの快表象（かつての満足の記憶＝表象）を呼び出すこと，すなわち幻覚⁵⁾することで，同じ満足をオートマティックに再現しようとするだろう。快原理の専制として性格づけられるこのプロセスを，フロイトは「一次過程」と呼ぶ。ここではこれ以上立ち入ることができないが，じつは，この「幻覚的満足」は，フロイトにとって，『夢判断』に名高いあの「願望充足」のプロトタイプにほかならない。つまり「願望」とは，その根源において，過去の幻覚的快を際限なく反復しようとする傾向なのである⁵⁾。

いうまでもなく，記憶された快表象をいくら再現しようと，それはあくまで記憶にすぎない以上，現に乳児を責め苛んでいる不快はけっして解消されない。そのため，心的装置にはより高次の組織化が不可欠になる。つまり，たとえ心的装置の内部にこの表象が点灯したとしても，不快の放出を一旦停止し，内部に現前する表象に対応する確固たる対象が外部にも，いいかえれば「現実」のなかにも，存在するかどうかを確かめたうえで（このプロセスがフロイトのいう「現実検討」である），もしこの対象の实在が確認されれば，不快を放出し，真の満足を手にする

一方、逆に、この対象が現実のうちに見いだされない場合には、それをそこに呼び戻す道筋を思考のなかで組み立てる、そうした機構が必要になる。エネルギーの拘束（放出の中止）によってはじめて可能になるこの過程をフロイトは「二次過程」と呼び、それを導く原理を「現実原理」と名づけた。この第二の原理のもとで、一次過程は必要に応じて抑圧され、幻覚的快の再生産を求める願望は、まさに夢に回帰するところの「無意識の願望」となるだろう。

さて、私たちの本題である性欲動（リビドー）の生成という問いに、いよいよ立ち戻らねばならない。注目したいのは、「寄りかかり（Anlehnung）」という概念である。寄りかかりといっても、誰かが他の誰かに、あるいは何かに、寄りかかるということではない。性欲動が自己保存欲動に寄りかかって（あるいは、凭れて）発達してくる、という意味である。フロイトにおいて、それは次のように語られる――

性源域の満足は、最初はおそらく、食べ物の欲求の満足と一つになっていたのだろう。性的活動はさしあたり、生命維持機能の一つに寄りかかり[lehnt sich ... an]、のちになってはじめて、その機能から独立する。赤ちゃんが、満ち足りて母の胸からのけぞるように離れ[zurücksinken]、赤らめた頬に至福の笑みを浮かべて眠りに落ちてゆくを見れば、赤ちゃんのこうした仕草が、長じてからの性的満足のときの表情にも決定的に残っているということを思わない者はいないだろう。いまや、この性的満足を反復したがる欲求[Bedürfnis]は、食べ物を摂取する欲求から切り離される。この分離は、歯が生じ、吸って食べるばかりではなく、噛んだりもするようになると、かならず起こる。⁶⁾

性欲動は自己保存欲動に寄りかかって芽生え、のちに自己保存欲動から独立する――フロイトは疑いもなくそう述べている。初めは空腹が満たされることが「快」として経験されるが、その快にはやがて口唇の快が伴うようになり、この後者が次第にいわば自己目的化して、指をしゃぶるという行動に繋がっていく。指しゃぶりにおいて、快が摂食欲求の満足と切り離されていることは明らかだ。ここでは、リビドー発達の最初のステージとされる口唇段階に記述のスポットが当たっているが、同様の「寄りかかり」と、その状態からの独立とは、続いて「肛門」という身体上のトポスで、排泄欲求をめぐっても起きるだろう。初めは排泄に伴う単純な快（腸内の緊張からの解放）であったものに、やがて括約筋を引き締めて糞便を溜める（＝便をコントロールする）能動的－サディズム的快と、そうして蓄えられた便が一気に排泄されたときの受動的－マゾヒズム的恍惚が加わる（このサディズム性－マゾヒズム性が、肛門期に特徴的なアンビヴァレンツをもたらす）のみならず、糞便という対象（自己の一部である対象）そのものが、排泄の世話をしてくれる大人に差し出される愛のギフトになりうる。

精神分析は、これら二つの段階（口唇段階、肛門段階）をいわば特権化し、さらに、男児にお

いても女兒においてもただひとつの性器、すなわちペニス（および女性におけるその解剖学的対応物であるクリトリス）のみが性的関心を方向づける段階とされる男根段階を加えて（ただし、女兒はこの時期にすでにヴァギナの機能を十分に理解していると考ええる——主に英国を中心とする——分析家たちは、男根段階という概念を用いず、代わりに早期の性器段階を想定する）、口唇段階⇒肛門段階⇒男根段階⇒潜伏期⇒性器段階（二次性徴）というリビドー発達論を構築してきた。いわゆる「エディプスコンプレクス」は男根段階に頂点に達し、その没落とともに潜伏期（セクシュアリティの一時的な衰退、あるいは沈静化）を導くとされることで、この図式に嵌め込まれる。ただし、リビドー（性欲動）はこの発達論に沿ってある段階から次の段階へ滞りなく移行していくわけではなく、各段階に必ず一定量の「固着（Fixierung）」を残さずにおかない。神経症とは、いったん性器段階に到達した主体が、生活上の困難（とりわけ愛の挫折）に見舞われたために、これらの固着点にリビドーを退行させてしまい、そこで症状を形成する病理にほかならない。その際、口唇段階、肛門段階、男根段階への退行が、それぞれヒステリー、強迫神経症、恐怖症に対応すると一般に考えられている。だが、このように「寄りかかり」によってリビドー的快（その追求が私たちの「セクシュアリティ」である）が目覚める身体部位は、けっして口唇や肛門に限定されない。性的興奮を催す身体領域という意味で「性源域（erogene Zone）」と呼ばれるこれらの部位は、口唇、肛門と同じく「開口部」と性格づけられる目や耳や鼻をはじめ、身体の広い部分に及び、それどころか、フロイトがその性源的性質を特権化する「皮膚」と「粘膜」を通じて⁷⁾、身体全体にあまねく行きわたっていると考えて差し支えなからう。

ところで、口唇欲動を生み出す「寄りかかり」についての先の引用文のなかで、フロイトは「性欲動」「自己保存欲動」（あるいは「自我欲動」）というタームを用いず、それらに代えて「性的活動」「生命維持機能」と記していた。同じ『性理論のための三篇』には、「性欲動」のほうは他の箇所に幾度も登場するものの、「自己保存欲動」「自我欲動」はやはり見当たらない。これはひとえに、フロイトが「自己保存欲動」「自我欲動」というタームを用いるようになるのは1910年であるのにたいし、『三篇』の初版はすでに1905年に刊行されていたという歴史的経緯に拠るのだろう。とはいえ、性欲動について論じるには、「寄りかかり」理論をはじめ、いくつもの説明が必要である一方（見方によっては、『性理論のための三篇』全体が性欲動とリビドーの説明に費やされているともいえる）、自己保存欲動の内容については「生命維持機能」と記せば事足りてしまうことに変わりはない。実際、フロイトは1915年に欲動を「恒常的な力（eine konstante Kraft）」⁸⁾と性格づけているが、「〔欲動の〕衝迫の恒常性は、欲動をなんらかの生物学的機能に同化することをいっさい禁じる」⁹⁾というラカンの指摘を俟つまでもなく、この性格は性欲動には認めることができて、いったん満たされればしばし沈静化し、時間の経過とともに再び昂進してくるというリズムを備えた機構には当てはまらない。ようするに、自

己保存欲動（自我欲動）とは生理的欲求を指すと考えてよいし、むしろそう名指すべきではないのか（フロイト自身が現に「生命維持機能」と記しているように！）。というのも、そうすることによって、性欲動のいわば非自然的性格がいつそう明瞭に浮かび上がるからだ。つまり、性欲動とは、生体にもともと備わる機構、すなわち生物学的機構を利用しつつ、そこから派生してくるもの、あるいは、それに上乘せされるもの、自らを上乘せするものにほかならない。

実際、これは、フロイト理論のこの部分をリメイクする最新の試みを行ったフランスの精神科医師・精神分析家クリストフ・ドゥジュールが採った戦略である。ドゥジュールは、フロイトの自己保存欲動をやはり「生理的欲求」とみなしたうえで、両欲動の関係を二つの「身体」の関係、すなわち「生物学的身体」と「エロース的身体」の関係として位置づけ直した。フロイトの「寄りかかり」理論は、ドゥジュールによれば、生物学的身体がリビドーによって再編されていくプロセスの記述にはかならず、ドゥジュールはこのプロセスを、性欲動（エロース）の「寄りかかり」よりもむしろその——いわば革命的射程をもった——独立のほうにアクセントを置いて、身体の「リビドー的転覆」と再定式化した。ただし、この「転覆」とは、身体諸「器官」の乗っ取りではなく、その「機能」の変えない書き換えを意味する。フロイトのいう「性欲動」は、生理的なものが心的装置（の労働）を通過してはじめて、その結果として生産される——ドゥジュールはそう再定式化する。心的装置のこの働きを「水車」に準えるドゥジュールの比喩は明快だ。自然の水流＝生理的なものの流れ、水車＝心的装置とすると、水車によって行われる仕事（たとえば、麦の穂をすりつぶす挽き臼を回すこと）こそがリビドー的転覆の現場であり、その結果として身体のエロース的諸機能が獲得される、ということである¹⁰⁾。

こうして、私たちはいまや、フロイトにおける「愛」の生成と発展の基本的図式を見わたしたことになる。先に述べたとおり、こうして成立する心身のリビドー体制は本来的に「性愛」のシステムであり、夫婦間（異性カップル、同性カップルを問わず）の愛のメタ心理学的基礎をここに求めることに支障はない。だが、その一方で、子から親への愛や、親から子への愛を、こうした図式によって基礎づけることには、ためらいを覚える。子が親に懐く愛情は、ゆくゆくはリビドー化を免れえず、性愛化され、さらには抑圧される運命にあるとしても、親にたいする乳幼児の絶対的とも呼べる依存（フロイトはこの状態を「寄る辺なさ」と呼んだ）は、何かもっと生命的な執着のようなものを芽生えさせるのではないのか。他方、親から子への愛は、フロイトにおいては「情愛（Zärtlichkeit）」という、「目標制止され（zielgehemmt）」、脱性化されたリビドーとみなされることになるが、リビドー化＝性愛化がいったん完成した心身のシステムにおいて、一部のリビドーを脱性化して用いるという、遠回りである上に、同胞愛や友情のような他のリビドー的關係にも等しく当てはめうる概念化によってしか、親から子への親密さを論じることはできないのだろうか。

まず、前者の問いについていえば、フロイトはむしろこうした問いをあらかじめ見越して、議論を組み立てていたと考えてもよいように思う。これは口唇リビドーに特に帰される特徴だが、「寄りかかり」による快の性愛化は、じつは、親（育児者）を対象にする「愛」にすぐには結びつかない。なぜなら、口唇の性愛化から最初に帰結するのは、指しゃぶりという「自体愛（Autoerotismus）」だからだ。自体愛とは、リビドーがその源泉（性源域）で自足されている状態であり、対象を必要としないし、それどころか、対象はそこでは障害物ですらありうる。だが、口唇の自体愛が乳幼児のセクシュアリティの基調をなす時期にも、フロイトが「自己保存欲動」と呼んだ生理的欲求——ここではもちろん食欲（摂食欲求）——は繰り返えし昂じることをやめず、他者を介しての満足を求めつづけるだろう。とすれば、口唇の自体愛と並んで、それとは異なる性質の（つまりリビドー的でない）対象愛、あるいは対象愛に似た何か、それに準ずる何かが、そこに厳然と存在すると想定することが許されるはずだ。後年、フロイトの没後に、英国の精神分析家ジョン・ボウルビィが「愛着」と名づけることになるのは、まさにそのようなヴァイタルな愛のことではないだろうか。ただし、愛着を左右するのは食べ物ではなく、ケアと応答性であるとするボウルビィは、フロイトとはいささか異なる理論的図式に立っている。だが、フロイト欲動論の基本線を踏襲するジャン・ラプラランシュ（追って言及する）やドゥジュールは、ボウルビィを踏まえた上で、同じ概念をフロイトのいう「自己保存欲動」の側に位置づけることをためらわない。ドゥジュール曰く——「愛着のうちに、子どもが生物学的に生き延びるのに欠かせない生得的な諸行動の組み立てが位置づけられるのである」¹¹⁾。

こうした現代的解釈に照らすとき、私たちのうちには次のような印象が立ち上ってくる——「母親結合〔Mutterbindung〕は、まさにそれが最初の結合であって、あまりに強烈〔intensif〕であるがゆえに、減びなくてはならない」¹²⁾ と、1931年、いわゆる「前エディプス期」の母子関係について書きつけるとき、ほかならぬフロイト自身が、この「結合」¹³⁾ を性愛的なものとは別の次元に見いだされるものと想定していたのではないかと。いや、フロイトは、同じ「結合」の強烈さをあくまで「幼児期のセクシュアリティの本性」に由来するものと位置づけており、フロイトにおいてはこのように、いかなる愛着もリビドー的な相のもとに措かれると考えなくてはならないのかもしれない。にもかかわらず、早期の母親結合が他のリビドー的紐帯とは異なり、際立って「強 烈」であるのは、それが「最初の結合」であると述べられているように、リビドーが生物学的機構に寄りかかっている度合いが大きいからであると推論せざるをえない。つまり、フロイトにおいて、「愛着」は、生理的欲求と生物学的身体^{インテンシフ}の諸過程にのみ根ざすわけではないにせよ、芽生えたばかりのリビドーがこれらの過程に大いに寄りかかり、それに圧倒されている状態を意味しうるのである。そこから、フロイトは「愛」というものをいわばスペクトラム状に捉え、完全な性愛から、リビドー的成分がきざりなく微少な愛ま

でを、そのなかに見ていたと考える余地が生まれないだろうか。実際、成人の「対象選択」のタイプ（愛の対象にどのような相手を選ぶか）を二つ（のみ）に分類するフロイトが、その一方を「寄りかかり型」と称するとき、いま述べた「スペクトラム」を念頭に置いていなかったとは考えにくい。もう一方のタイプである「ナルシシズム型」の対象選択には、①自分自身がそれであるところのもの（自分自身）、②自分自身がそれであったところのもの、③自分自身がそうなりたいところのもの、④自分自身の一部であった人物、と四つの下位区分が与えられるのにたいし、「寄りかかり型」のほうは、①養ってくれる女性、②保護してくれる男性と、あたかも性差のみを反映するかのような分類に絞られ、いずれの場合も生命維持に力を貸してくれる他者という面が際立たせられるのみであるのは¹⁴⁾、多くの成人の対象選択に、程度の差こそあれ、リビドーがまだ生理的機構に寄りかかっていた時代（すなわち乳幼児期）の他者との関係の痕跡が認められるからだ。とすれば、そのような痕跡を生む要因が早期に経験されればされるほど、リビドーの関与率は低く、生理的・生命的機構の支配率が高い愛のスタイルが形成されるだろう。その根底にまで遡行することができれば、そこに見いだされるのは、理論上、性愛化の度合いがかぎりなく低い愛着の形であるにちがいない。

Ⅲ ラカンの言語論的モデル——欲求、要求、欲望

さて、残るは「親から子への愛」のメタ心理学的な評価である。

先に挙げた対象選択の諸タイプにおいて、フロイトはこれをナルシシズム型の④に分類していた。そこに提示されたカテゴリーから選ぶなら、親から子への親密さが落ち着く先は、それ以外にない。だが、本稿が拠って立つ理論的マップを辿りながら、私たちが出くわしたのは、この「愛」がどれほど性愛的なものであるか、あるいは脱性化されているのかという問いだった。この問いを突き詰めていくには、対象選択型の議論はほとんど役に立たない。というより、私たちの問いはそもそも「対象選択」の問題に還元されない。

だが、残された課題の解決に挑む前に、私たちはここで、乳幼児期の子どもと親の関係を考えることにかかわる、フロイトとは異なる理論的モデルを参照しておきたい。それはラカンの言語論的モデル、とりわけ、1950年代後半にいわゆる「欲望のグラフ」の構築の一環として錬成された「欲求 (besoin)」「要求 (demande)」「欲望 (désir)」の三カテゴリーに関する理論である。これを参照することは、このあとの議論の補助線にもなる。

ラカンには、さまざまな位相での「愛の理論」が存在し、その最も一貫したもの（三〇年もの長きにわたる「教え」の根本に定着し、全体に行きわたっている、あるいはそのように想定されうるもの）のひとつは、いわゆる「鏡像段階」（生後半年から一年半の子どもが、鏡に映った自らのイメージを自己像と認識し、歓喜するモーメント）に起源をもつ想像的愛（想像界の愛）の理論である

が、これについては、ここでは立ち入らない。生物学的に早産状態で生まれ、神経系の未発達ゆえに長らく身体の統一的感觉をもたずにいた乳児が、鏡のなかにイマージュとしての自己を発見し、それまでの「寸断された身体」状態から救われることで、このイマージュやそれに類するものを愛する（同時に、このイマージュを強奪しに来る他者に憎悪を向ける）ようになる、とするこの理論は、ラカンにおけるフロイトのナルシズム論の翻訳にほかならず、この後者の理論が私たちの関心の埒外にある理由（いましがた述べたそれ）を、ここにも当てはめざるをえない。

私たちが注目しなくてはならないのは、ラカンのなかで多少なりとも一貫したもうひとつの愛の理論であり、そこでは象徴的愛（象徴界の愛）が主題化されている。その出発点は、フロイトがかの二原理（快原理／現実原理）を論じる際のそれと同じく、空腹のために泣く乳児であるが、そこから組み立てられる理論の風貌は、フロイトの場合とガラリと異なる。ラカンはこの泣き声をひとつの「シニフィアン」と捉え、ここでは特定の育児者だけでなく、乳児を取り囲む「語る大人たち」の世界全体を指すと考えてよい〈他者〉（大文字の他者, l'Autre）に向けて、このシニフィアンによってなされた呼びかけ（＝要求）が、もっぱらその一事（泣き声というシニフィアンによって呼びかけるという行為）をもって、無条件的な愛の要求になる、と説く。そしてその根拠は、生理的なものである欲求とシニフィアンの形をとる要求のあいだに必然的に生じる隔たりにほかならない。

どういことだろうか。お腹の減った乳児が泣く。といっても、乳児にはおそらく、自分を苛む欲求が食欲であるかどうかすら、おそらくまだ分からないのだが、とにかく内的な（あるいは身体的な）刺激のゆえに泣く。すると、そばにいる親（もしくはその役割を代理する大人）がそれを聞きつけて、ミルクをくれる。この〈他者〉は、乳児の泣き声をシニフィアンとして聴き取り、そのうちに「空腹の訴え」（食べ物の「要求」）という意味を見いだして、それに対応する対象すなわちミルクを与えるわけである。乳児の側からすると、親という〈他者〉の介入によってはじめて、自分の泣き声がシニフィアンとして機能したこと、そしてそのシニフィアンが〈他者〉の場で意味を与えられたことを、事後的に、呑み込むことになる。そしてそのとき、乳児ははじめて「主体」になる。「シニフィアンの主体」あるいは「話す主体」の誕生である。

だが、しいていえば「現実界」に属する欲求と、シニフィアンによって形づくられる要求とは、本来的に重なり合わない。といっても、それはたんに、乳児が泣いたのはじつは空腹のせいではなかったかもしれない、とか、乳児が泣いたのはたしかに空腹のせいだったが、ほしかったのはミルクではなかったかもしれない、とかということではない。少なくとも、そうしたこと「だけ」ではない。よりラディカルに、要求とは〈他者〉の「現前」の要求、〈他者〉がそばにいてくれることの要求、すなわち「愛の要求」でありうるからだ。ラカン曰く――

要求は、授けられうるいっさいのものを愛の証に変容させることで、そのものの個別性を取り消すのであり、要求が欲求のために獲得する満足さえもが、愛の要求を踏みにじるものにすぎなくなって、価値を失ってしまう（こうしたこといっさいは、〔母子関係を軸に分析を進める〕ナース分析家たちが熱心に取り組んできた初期ケアの心理学のうちに完璧に感知されうる）。¹⁵⁾

そして、要求と欲求を隔てるこのギャップこそが、「欲望」にその存在論的根拠を与える。ラカンが描くのは、まるで〈要求－欲求＝欲望〉と等式化したくなるような三者の関係だ――

欲望は、要求が欲求から引き裂かれる余白に芽生える。この余白は、要求――その訴えは、〈他者〉に向けられてはじめて無条件になる――が、そこに欲求がもたらしうる欠損の形で開くものである。欲求が要求に欠損をもたらしうるのは、普遍的な満足に恵まることがないからである（そのことが「不安」と呼ばれる）。¹⁶⁾

なるほど、ラカン理論のこの部分は、ある意味では、フロイトの「寄りかかり理論」の異本のようなものといえるかもしれない。というのも、ラカンのいう「要求」は、その起源において生理的な欲求に寄りかかりつつ（生理的な欲求のもとで発生しつつ）、それから離れていくものとして概念化されているからだ。だが、ここでは、「愛」（要求の無条件性）はいわば言語の効果の次元に位置づけられるのであり、「快」のような身体的・感覚的事実からは截然と切り離される。いいかえれば、フロイトのリビドー概念が、その経済論的相貌とともに、ここでは不要になる¹⁷⁾。それだけではない。ラカンのこのモデルは、シニフィアン¹⁸⁾の介在が乳児と大人¹⁹⁾の関係をいかに――こういってよければ――単純な刺激－反応図式には収まらないものに変じてしまうかを描き出している。つまり、乳児における欲求刺激の増大⇒乳児の泣き声⇒大人の反応⇒乳児の満足／不満足という、刺激と反応の連鎖は、ラカンにおいては、欲求と要求の乖離（位相の相違、隔たり）という一事によって、少なくとも「泣き声」以降の「⇒」について、大きく揺らいでしまう。なぜなら、この乖離のために、欲求と要求の充足は二つながらに自明なものではなくなってしまうからだ。いや、むしろ、欲求と要求の乖離には、両者の根源的な充足不能性が必然的に伴う、と言わなくてはならない。ひとつの欲求が要求として〈他者〉に伝えられる（伝えられねばならない）時点で、この要求は――〈他者〉に向けられるがゆえに、いや、そのようなものとして〈他者〉によって受けとられるがゆえに――無条件的な「愛の要求」になり（あるいは、そのような本性を含むことになり）、それ以後、欲求のいかなる満足も、それが要求を「踏みにじる」ものになり果てるという意味で、要求の不充足を際立たせるだけでなく、まさにその理由で、欲求自体の満足としても挫折の烙印を押されることを免れえない

(結果的に愛の獲得をもたらさなかったいかなる欲求充足も、失敗とみなされざるをえない)。ようするに、乳児と〈他者〉のあいだに要求が登場するやいなや(要求は定義上〈他者〉にたいする要求である以上、それは主体と〈他者〉のあいだにしか到来しない)、満足とは何であるのか、一気に不透明化してしまうのである。

だからこそ、私たちは、このような「要求」を向けられた者、あるいはそれを受けとった者、すなわち、ラカンがいうところの〈他者〉の側に、視線を移さねばならない。愛を要求された者は、それを要求した相手にたいして、いかに応答しうる、あるいは、すべきなのだろうか。この問いへのひとつの答えは、愛についてのラカンの名高いテーゼのなかにある。曰く、「愛とは、自分がもたないものを与えることである」。キリスト教神秘主義を代表する教父エックハルトに由来するとも言われるこのテーゼの意味するところを捉えるのは、私たちの辿ってきた文脈からすればたやすい。無条件的になされる要求への応えとして、自分のもっているものを与えることは、要求を欲求に連れ戻すこと、欲求の水準で要求に応じることにはほかならず、それは——ラカンの言葉をいまいちど繰り返すなら——「愛の要求を踏みにじる」ことに等しいのである。このような誤った応答の典型をラカンが拒食症の親に見ているのは、それがフランスにおけるこの病理のエピデミックの四半世紀前だったことを思えば、なかなかの慧眼といえるかもしれない——

子どもはつねに存在の懷で安んじられるわけではない。とりわけ、子どもの欲求について自分の考えをもつ〈他者〉が割り込んできて、自分がもっていないものの代わりに、もっているものの粥が息が詰まるほど子どもに流し込む場合、すなわち、自らがおこなうケアを愛の贈与と混同する場合には。

最大の愛情で育てられている子どもこそが、食べ物を拒絶し、この拒絶をひとつの欲望のごとくに振りかざすものである(アノレクシア・ネルヴォーザ)。¹⁸⁾

こうして、子どもの愛の要求に応じられぬ〈他者〉(ありていにいえば、薄情な親)ではなく、むしろ、ありあまる愛(と自らがみなすもの)を子どもに詰め込み、子どもがそれを拒否することしかできなくなってしまうケースに、ラカンが注目しているのは、おそらく偶然ではない。ラカンは、子ども(主体)の要求にたいする親(〈他者〉)の応答が、じつは、子どもの側から見れば、それ自体ひとつの要求でありうることを、いや、そうでしかありえないことを、浮き彫りにしたいのである。なぜなら、そこにおいて主体は初めて〈他者〉の欲望の前に立たされるからだ。自分が求めるもの(愛)と異なるものを返す〈他者〉にたいして、「この人は自分に何を望むのだろう」と問うことで、子どもは〈他者〉の欲望にひとつの謎の形で直面する。その応えを探り、追い求めることこそが、人生の早期における主体の課題になり、主体自身の欲

望の発展、いや主体と〈他者〉の欲望の「弁証法」の、軸となるだろう。かくして、ラカンが人口に膾炙させたもうひとつ別のテーゼが説得力をもって浮かび上がる——「人の欲望とは、〈他者〉の欲望である」¹⁹⁾。もちろん、このように記述されるのは、欲望の到達点ではなく、むしろその起点、いわば欲望の弁証法のゼロ地点にほかならない。そこから出発して、主体はいかに自分自身の欲望、自分に固有の欲望を見いだすに至るのだろうか。精神分析の最も基本的なプロセスは、この問いによって印づけられるといってよい。

だが、ラカンによる以上のような組み立ては、私たちが先に措定した問いに照らして、いささか極端にすぎないだろうか。フロイトの性愛主義的な理論では、子にたいする親の愛を「リビドーの脱性化」という覚束ない見当によってしか概念化できないのにたいして、ラカンのモデルは、愛の運命が紡がれる地平をシニフィアンの天空へと一気に舞い上がらせることで、子どもと大人のあいだの要求の交換や欲望の弁証法から、いっさいのセクシュアリティ（性的なファクター）を脱色してしまうようにみえる。実際には、ラカンの理論は、主体の要求（愛の無条件的な要求）にたいする〈他者〉の応答＝要求が、セクシャルな内容や意味を帯びうることを、いささかも妨げはしないのだが、ラカン自身は、残念ながら、この点に積極的に踏み込みこんで、自らの議論を補足することがなかった。

そこで、この遺漏（私たちの目から見た遺漏）をカバーするように思われる理論に、あらためて目を向けなくてはならない。ラカンの元愛弟子で、1963年から64年にかけてフランス精神分析に起きた政治劇の際にはラカンに造反したジャン・ラブランシュが、しかしラカンの教えを取り込みつつ構築した「誘惑の一般化」理論である。最後に、そのエッセンスを見渡しながら、子と親のあいだで何が起きているのかについて、私たちなりの見通しを立ててみたい。

IV ラブランシュの「誘惑の一般化」理論——子ども対「大人の世界」

いま「子と親のあいだで」と述べたが、ラブランシュは自らが「原状況（situation originaire）」と呼ぶ、「人間存在の起源に、具体的に、現前することがら」²⁰⁾について、そのように記すことを繰り返しかえし拒否し、むしろ「乳児」と「大人の世界（monde adulte）」の「対面（confrontation）」という表現にアクセントを置く。曰わく——

原状況とは、新生児、すなわち、いまだ話さざる者というその語源的意味における子ども〔enfant〕が、大人の世界と向き合うことである。²¹⁾

ここには、人間の心的生を根本的に方向づける起点に、エディプスの「状況」や母子の二者関係の「状況」とは別のものを見いだすという含みがある。

ところで, *infans* (言葉を持たざる者) としての「子ども」とは, ラプラシユにとって, 「生物=心的個体 (*individu bio-psychique*)」である。生後どれほど間もない乳児であっても, それを純粋な有機体, 純粋なマシンとみなし, そこにあとから心や魂といったものが接ぎ木されると考えることはできない。この世に生を受けた瞬間から, 子どもは生物学的存在であると同時に心的存在であり, この二つの面を, たとえ発生論的な時系列上であれ, 切り離すことはできない。実際, 「新生児を僅かでも観察してみれば, 意味のある振る舞いや, さらには伝達的な振る舞いが見られるものである」²²⁾。ただし, この生物=心的存在は, フロイトが「寄る辺なさ」と呼んだ無力さのうちにある。寄る辺なさ (*Hilflosigkeit*) とは, 文字どおり「助け (*Hilfe*)」が「ない (*…los*)」状態, つまり, 自分で自分を助けることができず, 「余所からの助け (*fremde Hilfe*)」が必要な状態にほかならない。しかも, 同じフロイトが第一欲動論で示したとおり, 人間は「自己保存」と「セクシュアリティ」という二つの範域で未熟であり, 寄る辺ない状態にある。「現状況」が伴意するのは, それゆえ, 子どもはこの二重の寄る辺なさから出発し, 「大人の世界」とのコンタクトを重ねながら, いかに自己を形づくっていくか (「余所からの助け」がなければ生きていけないほど, 他者にすでに開かれ, 依存している子どもにとって, これは「いかに自己を閉ざしていくか」という問いになる), そしてそのために, いつ, いかなる契機によって, コミュニケーションを行うようになるのか, という問いである。ラプラシユによれば, この問いを解く鍵は「誘惑 (*séduction*)」のうちにある。

初期精神分析の歴史やフロイトのバイオグラフィに親しんでいる向きには, このような文脈への「誘惑」の登場は, ある種の戸惑いを懐かせるかもしれない。精神分析草創前夜というべき 1890 年代, フロイトは, 大人の男性, とりわけ父親から受けた性的誘惑 (今日ではむしろ「性暴力」というべきか) が外傷体験として報告されるヒステリーの症例を数多く診ており, こうした経験から「ヒステリーを引き起こす外傷体験は大人からの性的な誘惑である」という仮説を導くとともに, 1896 年のウィーン医学会においてこれを意気揚々と発表することをためらわなかった。にもかかわらず, 早くも翌年には, この仮説に強い疑いを懐き, やがてそれを放棄してしまう。その理由として, フロイトは主に, ① 当の仮説に則って治療に完全に成功した事例はなく, 部分的な成功は別のもっと単純な仮説で説明がつく可能性があること, ② 父親の倒錯が決定因となるヒステリーの頻度が予想以上に高いのにたいし, 子どもにたいする父親の倒錯的行為がそこまで一般的であるとは信じがたいこと (ヒステリーの発症には他の要因の関与も必要であるため, 父親の倒錯の頻度は実際のヒステリーのそれよりさらに高く見積もらねばならない), ③ 無意識のうちには, 出来事の現実性を担保する指標が存在しないため, 真実と「情動を備給されたフィクション」とを互いに区別するのは不可能であること——を挙げた²³⁾。フロイトはここから, 無意識的「空想」と「心的現実」を重視する方向に, 自らの理論をシフトさせていくだろう——「神経症の症状は現実体験と直接に結びついているのではなく, 願望

空想〔Wunschphantasie〕と結びついている。また、神経症にとっては、物質的現実よりも心的現実のほうが重要な意味をもっているのである」²⁴⁾。

フロイトによるこの「誘惑理論」の放棄は、それが宣言された現場とみなされる一通（1897年9月21日付）を含む『フリース宛書簡』（英語コンプリート版）の編集者ジェフリー・M・マッソンによって、1980年代に、子どもが家族内で性暴力の犠牲になったことを否定し、証言された性暴力を空想の産物とすることで、当時の社会秩序に阿った挙措として糾弾され（『真実への攻撃』、1984）、さらに次のディケイドには、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を焦点化する文脈のなかで、ジュディス・ハーマンも同様の批判を展開した（『心的外傷と回復』、1992）。だが、こうした議論や、それに続く論争については、ここでは立ち入らない。ラプラランシュは、マッソンやハーマンとは異なる立場から、誘惑理論への回帰を試みており、私たちにとって重要なのは、そのラプラランシュの意図を汲みとることである。ラプラランシュによれば、フロイトの誘惑理論（自らが行う誘惑の「一般化」と対比しつつ、ラプラランシュはこれを「限定された誘惑」の理論と呼ぶ）は、「誘惑の事実性と理論の複合性のあいだの緊密な織物」であるという強みをもつがゆえに、そのなかの「いくつかの環が外れてしまうと、全体が解体してしまう」²⁵⁾ 弱さをも併せもつ—— 実際、先に挙げたいくつかの理由で、フロイト自身がこの「弱さ」もろとも理論を放棄してしまったように。にもかかわらず、「フロイトをその最良の部分で捉え、そこからインスピレーションを得ようとする」²⁶⁾ 自らの長年の姿勢を貫きつつ、ラプラランシュは、この理論の強みのほうを、今日の世界精神分析に活かすことを選択するのである。

といっても、それはフロイトの誘惑理論をそのままリヴァイヴァルすることを意味しない。ラプラランシュは、この理論に備わる三つの様相、すなわち、「時間的」（複数の場面が連鎖し、先行する出来事の外傷の意味が、後発の出来事によってはじめて—— 事後的に—— 浮かび上がる）、「局所論的」（外傷の意味の到来は、それへの防衛反応である抑圧を招き、無意識という別のトポスに追いやられる）、「翻訳的」（後発の出来事が先行するそれを翻訳する）と銘打たれる各様相をふまえた上で、フロイトが想定していた「大人の男性による性暴力」という限定を外し、より広範な三つの水準で「誘惑」を捉え直そうとする——

(1) フロイト的「誘惑」（限定された誘惑）に等しい、あるいはそれを含む「幼児期誘惑（séduction infantile）」。これは「まだ幼い子どもが、大人のセクシュアリティの侵襲に、受動的に、直面させられる「早熟な性的経験」の出来事」²⁷⁾ を指す。

(2) 発達論的には幼児期誘惑に先立つ時期に措かれるべき「早期誘惑（séduction précoce）」。これは、原形の誘惑理論を放棄したのち、フロイトが前エディプス的な母子関係のうちに見いだした「誘惑の重力点」ともいうべきものであり、「子どもにたいして惜しみなく与えられる身体的ケアによって運搬される」²⁸⁾ 誘惑を謂う（フロイトが想定するように、母親による身体的なケアは、端的に、性器における快の感覚を子どものうちに目覚めさせずにおかない）。

(3) 先述の「原状況」の「原」と同じ意味、すなわち根本にあって他のものを方向づけるという意味で、「原誘惑 (séduction originaire)」と名指される水準。ラプラランシュはこれを、「大人が子どもに、ヴァーバルなシニフィアンのみならず、ノンヴァーバルなシニフィアン、それどころか行動によるシニフィアン、そのいずれにせよ、無意識的な性的意味合いが染みこんだシニフィアンを差し出す根本的な状況」²⁹⁾と定義する。その典型は、フロイトが「原場面 (Urszene / scène originaire)」と呼んだもの、すなわち、子どもが——多くの場合、偶発的に——目撃してしまう両親の性交の場面である。ラプラランシュのいう「性的意味合いが染みこんだシニフィアン」とは、いうまでもなく、性的領域において寄る辺ない状態にある子どもにとって、ひとつの「謎」として経験される。とすれば、「原場面」ほどに、そのような「謎めいたシニフィアン」を子どもに容赦なく差し向ける状況がほかにあるだろうか。だが、「原誘惑」にはもうひとつ、他の二水準の誘惑と比べて決定的に重要な要素があり、「原場面」はこの点でもやはり典型の名にふさわしい。その要素とは、「能動－受動」関係の顕在である。「幼児期誘惑」や「早期誘惑」は、子どもにとって、純粋な受動性においてしか経験されない。それにたいして、「原誘惑」は子どもを能動性－受動性の対立に直面させる。そしてこの特徴こそが、これら三つの水準のあいだにひとつのヒエラルキーを成り立たせる——「原誘惑は、「能動性－受動性」の非対称を導入する点で、他の二つの誘惑の究極の本質となるのである」³⁰⁾。

さて、以上のきめ細かな検討を経て、ラプラランシュが再構築した総合的「誘惑理論」、すなわち「誘惑の一般化」は、いたってシンプルな図式として提示される——

一般的なシェーマとは、その身体＝精神的組み立てが圧倒的に欲求の水準に位置づけられる個体が、大人から発せられるシニフィアン、すなわち、これらの欲求の満足に結びついているものの、他の——性的な——メッセージの潜在性、いや純粋に潜在的な問いかけを運んでいるシニフィアンに、向き合うことである。³¹⁾

「欲求」「シニフィアン」、そして、欲求の水準にあるものと、大人が発するメッセージのあいだにあるズレ——ここには、ラカンの「欲求／要求」シェーマの影響が明白である。つまり、ラカンにおける主体（乳児）が、自らの泣き声によって一気に要求＝愛の無条件性に吊り上げられるとともに、自分の求めるものと〈他者〉の返答＝要求の食い違いから、〈他者〉の欲望の前に立たされる、その弁証法を、ラプラランシュはフロイト由来の「誘惑」に寄りかかり、以上のような言葉で翻訳したのである。ただし、ラプラランシュは〈他者〉＝大人の返答（要求）のうちに、潜在的であるとはいえ疑いえない「性的」なメッセージが入り込んでいることを捨象しなかった——あたかも、いっさいを言語の効果に還元し、主体と〈他者〉の馴れそめを脱性化したかのようなラカンの図式に、セクシュアリティ（性的なもの）を充填し直すかのよ

うに。いや、それだけではない。上に引用した箇所が続けて、ラプランシュはこう述べている

これらの謎めいたメッセージは、それを制御し象徴化する困難な、不可能ですらある作業を〔子どものうちに〕呼び起こすのであり、この作業は必然的に、その背後に、無意識的な残滓をのこさずにおかない。その残滓とは、すなわち、われわれが欲動の「対象＝源泉」と名指すものである。³²⁾

この「対象＝源泉」とは、端的に「欲動を起動するもの」と考えてよい。フロイトは欲動の「対象」（たとえば乳房、自分の親指）と「源泉」（口唇領域）を区別し、それぞれの源泉に固有の対象が見いだされるという図を描いたが、ラプランシュにおいて、欲動を起動するスイッチは、大人の発するシニフィアン（ヴァーバル、ノンバーヴァル、振る舞い）を子どもが自分なりに捉えたあとに、なお残る謎のうちにこそ見いだされねばならない。それは、大人（のメッセージ）にたいする子ども（の理解）の本来的な「不適合」の結果であるといえるが、それだけではない。そこには、そもそも、「大人（の欲動）を動かしている対象＝源泉にたいする大人自身の不適合」³³⁾ もまた刻印されている。両親の性交を目撃することが、子どもにとってなぜトラウマになりうるのか。それは子どもが、この出来事を自らの理解の及ぶ範囲に同化できないからだが、この同化不能性は、ラプランシュによれば、当の場面が「それを演じている本人たちにとっても、部分的に不分明である」³⁴⁾ ことに由来する。そしてこの点では、両親の性交と並んで、「同胞の誕生」と「ジェンダーの差異」もまた同じ効果をもちうる（それゆえ、ラプランシュのいう「原誘惑」のカテゴリーに帰されうる）。これらの事件においても、「大人たちが自分自身にたいして説明できないという経路を通して、外傷的效果が生み出されるのである」³⁵⁾。かくして、欲動は、いや、欲動こそが、人間のセクシュアリティの根底に残存し続ける「謎」を大人から子どもへ、さらにその下の世代へと受けわたす精妙な装置となる。いかに逆説的に見えようとも、そこでは、大人のセクシュアリティの中核をなす謎が、理解されざる残滓として、伝達されることなく受け継がれ、次世代のセクシュアリティのモーターを構成していく。誘惑とは、ラプランシュにとって、このように「性の謎」の相続が繰り返される舞台なのである。

だが、私たちをラプランシュのもとへと向かわせたのは、「親から子への愛」を精神分析がいかに概念化しうるかという問いだった。寄る辺ない乳幼児が親に向けるヴァイタルな愛着、まだ限りなく微弱なりビドーが深々と生理的機構に寄りかかっているだけの愛にたいして、大人はいかなる愛で答えるのか、と私たちは問うたのだった。フロイトは、いったん完成された性愛において、一部のリビドーの目標が制止され、脱性化された愛、すなわち「情愛」について語ったが、それはあまりにも図式的で、友愛や同胞愛と本質的に区別することができない。

一方、ラカンは子と親の関係をエクスクルーシヴに言語（シニフィアン）の平面に落とし込み、主体と〈他者〉のあいだの「要求」の弁証法として捉え直した結果、あたかもそれ自体が脱性化されてしまったかのような理論モデルを現出させた。それにたいして、ラプランシュのモデルは、親が子に送り返す（あるいは、原場面や同胞の誕生のように、親が意図しなくても子どもが受けとらねばならない）メッセージがつねに、少なくとも潜在的には、性的なものであることと同時に、それにたいする子どもの根本的な「不適合」（ラプランシュにとっては、これこそが、ようするに、「寄る辺なさ」の本質である）を強調する。なぜなら、これらのメッセージを理解しようとする際に必ず子どものうちに残存する「謎」こそが、「身体＝精神的個体」としての子どもの成長の原動力になり、さらには、それが世代を越えて連綿と——子どもと大人のコンタクトが存在するかぎり——相続されていくからだ。

こうした議論を前にして、私たちが認識しなくてはならないのは、「親から子への愛」がいかに脱性化されているか（あるいは、いないか）という私たちの問いが、おそらく「偽の問題」だったということだ。たんに親が子に示す言葉や振る舞いだけでなく、子どもの目に留まる親の生全体が、情愛とともに性愛に満ち、色づけられたものであることは、いかにしても避けられないし（ラプランシュのいう意味での「誘惑」は、それゆえ遍在する）、むしろそれこそが子どもの身体的・精神的成長、さらには性的成長を促す最大のモーターになる。ただし、それだけに、子どもの成長にたいする親の責任、いや大人の責任は、なお重くなると考えなくてはならない。先に述べた「身体のリビドー的転覆」を、ラプランシュの誘惑理論を参照しながら構築したドゥジュールは、大人と子どものコンタクトにおいて、すなわち、ラプランシュが一般化した意味での「誘惑」の場面において、大人が示す特定の反応、とりわけ暴力や冷淡さによって、リビドー的転覆が挫折し、「子どもの思考が停止する」³⁶⁾ ことを警告している。これについての説明は、もはや必要あるまい。ドゥジュールのいう「思考」は、まさに大人の発するメッセージを翻訳し、理解しようとする子どものたえまない努力を含む。私たちとしては、結局のところ、こうした思考を妨げ、中断に追い込む大人の態度を「憎しみ」と呼び、それとは反対に、これを見守り、支える態度を「愛」と名指したい。フロイトが文明の行く末に思いを馳せて述べたように、子にたいする大人の振る舞いについても、私たちは同じ願いを繰り返すことが許されるだろう——「永遠なるエロースが奮起し、同じように不死身である敵との闘いで実力を発揮してくれることを、期待しようではないか」³⁷⁾ と。

注

- 1) Freud, S., *Massenpsychologie und Ich-analyse* (1921), in: *Gesammelte Werke*, Bd. XIII, Imago/Fischer, 1940, S. 99. 藤野寛訳『集団心理学と自我分析』, 岩波フロイト全集 17 巻, pp. 157-158, 一部改（邦訳文献からの引用文中にかぎり, [] は邦訳原文に挿入されている補足, [] は筆者による注記である）。「欲望（すること）」を意味するラテン語 libido の本来の発音は「リビドー」であり, 「リビドー」「リビード」いずれの表記も不正確さの点では同様である。本稿では, フランス語での発音に近い「リビドー」を採用する。
- 2) これはもちろん偶然ではない。およそ「名づけること」や「定義」は, メタファー（隠喩）に通じる機能を含みうる。
- 3) Freud, S., *Triebe und Triebchicksale* (1915), in: *Gesammelte Werke*, Bd. X, Imago/Fischer, 1946, S. 211-212.
- 4) Freud, S., *Das Unbehagen in der Kultur* (1930), in: *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, Imago/Fischer, 1948, S. 478-479.
- 5) フロイトの理論構築の経路からすれば, むしろこう言わねばならない——この「幻覚的満足」の仮説のうちに, フロイトは「願望充足」の存在論的根拠を見いだしたのである, と。ちなみに, この仮説はラカンやウィニコットの理論に取り入れられ, 豊かに展開された。ウィニコットにおける「中間領域」とは, 乳児の内界に乳房の幻覚が浮かんでいるときに, 外界から母親が実物の乳房を差し出すことで, 二つの現実（内的・外的）のオーヴァラップが生じた状態を指す。このオーヴァラップそのものを再現する対象がいわゆる「移行対象」である。
- 6) Freud, S., *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie* (1905), *Gesammelte Werke*, Bd. V, Imago/Fischer, 1942, S. 82. 渡邊俊之訳『性理論のための三篇』, 岩波フロイト全集 6 巻, pp. 232-233, 一部改。「性的活動はさしあたり, 生命維持機能の一つに寄りかかり, のちになってはじめて, その機能から独立する」の一文は, 1915 年の第三班で追加された。
- 7) Cf. *ibid.*, S. 83-84. 同上, pp. 234-235.
- 8) Freud, S., *Triebe und Triebchicksale*, *op. cit.*, S. 212.
- 9) Lacan, J., *Le Séminaire, Livre XI, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse* (1964), Seuil, 1973, p. 150.
- 10) Dejours, Ch., *Le corps, d'abord*, Payot, 2001/2003, p. 20. ドゥジュールのこの著作の主眼は, しかし, 身体のリビドー的再編そのものに焦点を当てるのではなく, それに伴いうる挫折（いかなる身体器官のリビドー的転覆にも, 程度の差こそあれ中断が起きうる）とその心的・病理的帰結を詳述することにある。
- 11) *Ibid.*, p. 172.
- 12) Freud, S., *Über die weibliche Sexualität* (1931), in: *Gesammelte Werke*, Bd., XIV, *op. cit.*, S. 528.
- 13) 人文書院フロイト著作集における当該論文の訳者（懸田克躬・吉村博次）がこれを「愛着」と訳しているように, ここでの「Bindung」は事実上, 英語の「attachment」に相応すると考えてよい。ただし, フロイトにおいて「Bindung」はリビドーも含めた心的刺激の「拘束」を指すことが多く, この「Mutterbindung」にも「リビドーによる母親との結びつき」というニュアンスが含まれる。
- 14) Cf. Freud, S., *Zur Einführung des Narzißmus* (1914), in: *Gesammelte Werke*, Bd. X, *op. cit.* ちなみに, ナルシシズム型のうち②, ③, ④については, それぞれ男性同性愛, 理想への愛, 親から子への愛が想定されている。
- 15) Lacan, J., *La signification du phallus* (1958), in: *Écrits*, Seuil, 1966, p. 691.

- 16) Lacan, J., Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien (1960), in: *Écrits, ibid.*, p. 814.
- 17) その分, ラカンにおいては, 逆に, セクシュアリティはそもそもいかに位置づけられるのか, という問いが立てられうる。それにたいして, ラカンは, 性源域となる身体の孔 (開口部) において, 各欲動 (正しくは, 各「部分欲動」といわねばならない) が, その孔を埋めに来る対象 (対象 *a*) を捉えようとする —— 対象をひと周りしてもとの孔に戻る —— というモデルを提示するに至る。Cf. Lacan, J., *Les quatre concepts...*, *op. cit.*, chapitre XIV.
- 18) Lacan, J., La direction de la cure et les principes de son pouvoir (1958), in *Écrits, op. cit.*, p. 628.
- 19) Lacan, J., Subversion du sujet..., *art. cit.*, p. 814.
- 20) Laplanche, J., *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, PUF (Coll. Quadrige), 1987/1994, p. 89.
- 21) *Ibid.*, p. 90.
- 22) *Ibid.*, p. 93.
- 23) Freud, S. *Briefe an Wilhelm Fließ*, S. Fischer, Frankfurt am Main, 2. Auflage, 1999, S. 283-284.
- 24) Freud, S. *Selbstdarstellung* (1925), in: *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, *op. cit.*, S. 60. 家高洋他訳『みずからを語る』, 岩波フロイト全集 18 巻, pp. 94-95, 一部改。
- 25) Laplanche, J., *op. cit.*, p. 106.
- 26) *Ibid.*, p. 105.
- 27) *Ibid.*, p. 106.
- 28) *Ibid.*, p. 119.
- 29) *Ibid.*, p. 125.
- 30) *Ibid.*, p. 127.
- 31) *Ibid.*, p. 128.
- 32) *Id.*
- 33) *Ibid.*, p. 129.
- 34) *Ibid.*, p. 126.
- 35) *Id.*
- 36) Dejours, Ch., *op. cit.*, p. 170.
- 37) Freud, S., *Das Unbehagen in der Kultur*, *op. cit.*, p. 506.

要 旨

「家族の愛」の一般理論というべきものは、はたして成り立ちうるのだろうか。

その（メタ）心理学的基礎を、フロイトからラカンを経由してフランスに流れ込む理論の系譜によって素描してみたい。

リビドーを愛によって、愛をリビドーによって説明しようとするフロイトのリビドー論が、その出発点とならざるをえないが、これはあくまで性愛のメカニズムとその発展の理論であるがゆえに、成人カップル同士の愛には無難に適用しうるとしても、子から親への愛や、親から子への愛を、その主要な図式によって翻訳することはむずかしい。

まず前者について、フロイトのリビドー生成論（いわゆる「寄りかかり」理論）には、親にたいする乳幼児の絶対的とも呼べる依存（寄る辺なさ）がもたらす生命的な執着を、リビドーの関与が限りなく小さく、生理的・生命的機構による支配が圧倒的である愛（＝愛着）として、正当にも描き出す余地を残している。

それにたいして、親から子への愛を精神分析はいかに概念化できるのだろうか。フロイトの語る「情愛」、すなわち「脱性化」された愛は、いささか図式的にすぎる一方、子と親の関係を主体と〈他者〉のあいだの「要求」の弁証法として捉えるラカンの言語論的モデルは、それ自体がほとんど脱エロース化された構図に見える。そこで、私たちが参照するのは、「誘惑の一般化」と銘打たれたジャン・ラブランシュの理論である。大人のセクシュアリティの中核をなす謎が、子どもに伝達されることなく受け継がれ、その心的成長を先導しゆくとするこの理論は、子にたいする親の愛がいかに脱性愛化されているか（あるいは、いないか）という問いそのものを「偽の問題」として退けるとともに、親子間でなされる心的な「相続」のありように私たちの目を向けさせる。

キーワード：リビドー、寄りかかり理論、欲求／要求／欲望、誘惑の一般化